

## 国頭のウェーキ＝シカマ関係

波 平 勇 夫

われわれが調査しているウェーキ（豪農）とシカマ（隷属農業労働者）は、近代沖縄農村の階層構造の両極を構成するものであり、その調査のねらいは幕藩体制の農村社会と近代沖縄農村の階層構造の関係、さらには近代以降、沖縄農村社会の階層構造の変動を分析することにある。当然のことながら、ウェーキ＝シカマ関係は、大きくは社会組織の1つを構成するものである。

調査は昭和53年8月に実施される予定であったが、限られた調査日程のため他の社会組織調査に集中して、ウェーキ＝シカマ関係は調査できなかった。そこで、日程を改めて、昭和54年6月8日、9日の両日、宮城栄昌教授、仲地哲夫南島文化研究所主事、筆者3名で調査した。

調査対象は、『国頭村史』<sup>(1)</sup>にあげられた国頭村のウェーキから、字佐手の前（屋号）、字辺土名の仲間（屋号）、字奥間の栄門（屋号）にしばられた。ここでは前2者だけ報告する。

まず、佐手部落の前からみよう。前は佐手部落の根神屋で、旧家である。しかし、家系は今から4代前の新里前元までしかわかっていない。2代目新里前良の七男にあたるという新里前光氏（明治39年生）によれば、前がウェーキといわれるほどの資産を形成したのは、3代目新里亀一（戦後没）で、その全盛時代は大正12年頃だという。前述したように、前は根神屋で、先祖伝来の根神地もあったが、資産形成は亀一の企業家手腕に負うところが大きいようである。当時、亀一は大型山原船を3艘有して、那覇および与論島と交易していた。たとえば、与論島へは薪、木材、竹をもっていき、帰りは豚、ニワトリ、大根、イモ、酒などをもってきた。そして、これらの商品は佐手の共同店で販売された。共同店は部落有であったが、亀一は実質的にその経営者であった。

土地所有面積は明らかでないが、辺土名に50ハキ（約9000坪）、佐手部落内に3ヶ所（面積不明）あったというから、中地主というところであろう。農業経営では、米づくりが主で、砂糖キビも少々つくっていたようである。それに、牛2～3頭、豚15頭ほど飼育していた。

農業は家族と下男・下女でやった。前光氏の幼少のころ、下男が5名、下女が3名いた。彼らは借金してその利息分を働いていた。それ以外の労働力としてフィヨ（日傭）、小作人、食事だけのために労働奉仕する人びとなどがあった。これら使用人のなかには「水ミー」といって、田の水を監視する人もいた。田はほとんど辺土名にあったので、水ミーは辺土名の人であった。

また、前は船を有して貿易を営んでいたことから、船子も雇っていた。彼らは佐手の人が大部分であったが、その他に粟国出身もいた（国頭と与論島の関係という観点から与論島出身者

(1) 『国頭村史』、前掲書、353頁。

が使用人のなかにいたかどうかたずねたが、確められなかった)。

これら労務者はいずれもそれぞれ自分の家から通勤していたが、食事だけは主人の家でとった。その場合、彼らは主人と別々に扱われた。主人の子どもたちは、ときには労務者と一諸に食事をとることもあったが、その場合でも特別扱いをうけた。

前がウェーキとして成長したのは3代目亀一の企業行為、商業活動に大きく依存しているようであるが、町方の商人と違い、農業経営もしていたことは地方ウェーキの特徴といえよう。また、低廉な労働力が資産形成に大きく寄与したことはいうまでもない。ところで、資産形成の諸条件に変化が生じたとき、ウェーキも変化せざるを得ない。前がウェーキから転落した理由はいくつかある。1つは、どのウェーキにも共通するものとして、低廉な労働力が本土の労働市場へ吸収され、人手不足をきたしたことである。つぎに、新造船の遭難がある。進水したばかりの船が処女航海で遭難沈没した。加えて、4代目新里善福氏(元国頭村長および琉球電信電話公社総裁)への学資仕送りがある。彼が学生の頃、月20～25円ほど送金していたが、当時、国頭のウェーキは資産はあっても現金はなく、そのため学資も大きな負担となった。

ウェーキの特徴として、前の場合、旧家であること、資産形成が比較的新しいこと、地主的要素と企業家的要素があり、どちらかといえば後者の面が大きいことなどがあげられる。前は旧家であるけれども、近・現代要素が混在した比較的新しい型のウェーキといえよう。

つぎに、もう1つの国頭ウェーキ、仲間屋についてみることにする。仲間屋の当主宮城親信氏(明治32年生)によれば、この家は現在までに8代目という。位牌の記載内容からみると、初代は島袋仁屋(乾隆41＝1776年死亡)、2代目宮城仁屋(嘉慶21＝1816年死亡)は前仲宗根掟、3代目不詳、4代目宮城筑登之親雲上(道光7＝1827年死亡)、5代目宮城筑登之親雲上(道光17＝1837年死亡)、6代目宮城親春(明治22＝1889年死亡)は辺戸親雲上、7代目宮城親吉(昭和28＝1953年死亡)は元国頭村長というように、代々国頭地方の役人であった。

資産形成に関するデータは得られなかったが、代々地方役人であることから、仕明地がその基礎になっているかも知れない。仲間屋の全盛時代は宮城親春時代で、それ以前に、田88ハキ(約5町3反)、畑88ハキ、それに山林が1、2町歩あったという。全盛時代の親春の偉業として、1886年(明治19)国頭間切に大暴風と早魃があったとき、親春は自己所有の田を質入れして国頭御殿から借財し、村民の救済にあたったことがあげられる<sup>(2)</sup>。

農業経営面では、米づくりが主であったが、砂糖も生産した。仲間屋の製糖は大正期がもっとも盛で、多いときは15～6挺つくっていた。米倉も家の周辺に4つ以上あったというから、米の生産高も大きかったと思われる。家畜も牛、豚など飼っていたが、規模は小さかった。

労働力はイリチリとシカマ(またはヒマッチュー)が主であった。正確な数字はわからないが、両者あわせて14～5名ほどいたという。宮城親信氏が成長してからは、イリチリ3名、ヒマッチュー3名いた。しかし、畑仕事となると、20～30名の労務者がいた。彼らはイリチリ、ヒマッチューに加えて、臨時に雇用される人びとであった。なお、仲間屋にはいなかったが、

---

(2) 『国頭村史』前掲書、300頁。

他家に与論島出身のイリチリがいて、名前はマンターといていた。

さて、仲間屋の傾斜は7代目親吉の時代にはじまる。その最大の原因はカツオ株である。昭和5、6年頃、辺土名、奥間、比地の人びと（主に資産家）は鏡地の当山全信のよびかけで、鏡地にカツオ製造工場(株)をつくることになった。ところが技術や経験の面で素人ばかりだったので、事業は失敗し、それぞれ負債をかかえて手を引いた。そこで、そのなかの主な資産家が4、5名でこの工場を買いとって再建しようとしたが、うまくいかず、ますます負債をかかえ込むはめになり、仲間屋の場合、所有土地半分を手離した。この事業の失敗で、辺土名、奥間、比地の資産家も同様な運命をたどった。奥間の栄門（屋号）もその1つである。

このようにみえてみると、仲間屋は地方役人＝土地集積という点で他のウェーキと共通点があり、また、企業に進出しようとして挫折した点で近代沖縄の豪農の性格を典型的に示している。ウェーキの役割の側面をみるうえで特筆すべきものがある。それは、7代目宮城親吉が「イソノ式」という新型の鋤を本土からもってきて普及させたことである。役場に勤めていたということもあろうが、ウェーキは農業技術の改善にも指導力をもっていたといえる。